

中学校体育における男女共習授業の実践

—ゴール型ゲームを通して—

北尾 陸人（鳴門教育大学）

1. 目的

本研究では、平成 29 年に告示された中学校学習指導要領解説保健体育編に「体育の授業は原則として男女共習で行うべきである」¹⁾と示されていることや、筆者が大学院での学びを深める中で授業に参加する生徒が「いつでも・どこでも・誰とでも」楽しんで運動できる体育授業を実践することを目的とした。

2. 研究方法

男女共習で行うために、男女間の技能差に着目し、運動が得意な生徒も苦手な生徒も今持っている力で楽しめるように、オランダで生まれた男女混合ゴール型競技の「コーフボール」を参考にし、バスケットボールと融合させ、「ミックスバスケットボール」と名前を付けて実践した。

- 1) 対象者：中学校 2・3 年生
- 2) 調査時期：令和 6 年 9 月 3 日～10 月 4 日
- 3) 分析方法：①日録への記録②テキストマイニングの活用（KHCoder を使用）③アンケート

3. 結果と考察

2 年 B 組の単元終了後の事後アンケートの記述をテキストマイニングを用いて分析し、共起ネットワーク図に表した。「バスケ」が中心性を示し、「ルール」と強い関係性を持っている。その周辺に「男女」「混合」「違う」「プレー」が配置している。これらより、生徒はいつものバスケットボールとのルールの違いや、男女混合であることを意識して取り組んでいたのではないかと考えた。また、「考える」に「ボール」「取る」「自分」が関係性を持っており、その周辺に「パス」が配置している。これは、パスを回したり、カットしたりするために、ボールや相手の動きを見ながら考えてプレーすることができていたのではないかと考えた。さらに、「シュート」に「入る」「嬉しい」が強い関係性を持っていることから、当然のことながらシュートを入れることにも嬉しさを感じていると解釈した。「楽しい」が 11 回出現し

ていることから、単元が進むにつれてポジティブに授業に取り組んでいたのではないかと考えた。これに関して、事前アンケートでは「楽しくない」と答えていた生徒が 9 人から、事後アンケートでは 2 人になった。特に女子生徒の全員が「楽しい」と回答しており、男女共習授業の成果と言えるのではないだろうか。

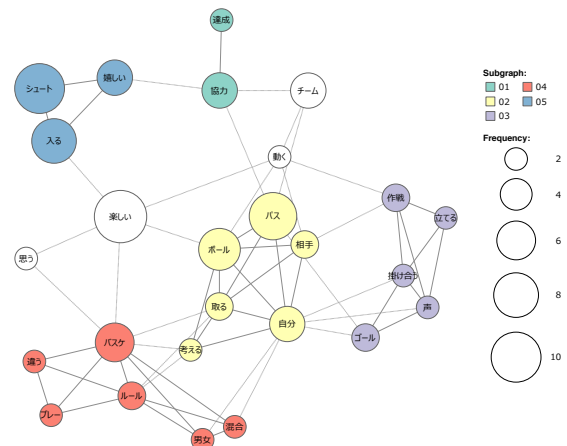


図1 事後アンケートの共起ネットワーク図

4. 結論

総じてみると、男女共習体育授業について感じたことは5つある。

1つ目は、スポーツを楽しむことのできる授業づくりが可能になったことである。2つ目は、ルールの工夫によって、男女間の体力差・技能差を縮めることができたことである。3つ目は、男女共習でゲームを行うことで、技能における劣等感を排除することができる可能性を見出したことである。4つ目は、運動が得意な生徒が自分のプレーが上手くいくこと以外にも、楽しさや面白さを見出すことができたことである。5つ目は、体育の授業以外の場面での生徒のやり取りが活発になったことである。

〈引用・参考文献〉

- 1) 文部科学省（2018）中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説体育編，東山書房 p236